

学生舞踏の理想を描いて

連盟を休連 そのころは、パートナーは学生でなくてもよかったので、勝つためにはプロを選ぶようになっていました。選手の練習も学内では行われず教習所のみで行われ、女性部員はいなくなっていました。連盟の会合は新宿の寿司屋で行われました。千葉大は部の建て直しのため休連し、パートナーも学生とする「学生舞踏」を目指したいと宣言しました。1/3程度の大学は賛同し連盟に止まって活動してほしいとの意見がだされましたが、なにしろこのころ2年生だった赤池、本郷、松永、栗原の男性4人しかいなくなっていましたのでしばらく休むことを宣言しました。

まず女性部員を確保する必要がありました。養護学校に行き、先生に学生舞踏を目指して部の建て直しをしている千葉大の舞踏研究会に生徒を勧誘したいと伝えたところ。生徒には「美男子4人が勧誘にきました」と伝えたあとで聞いたのですがなにしろクラスのほとんどが参加してくれました。今度は男性部員の確保です。部員集めもその後新生が大量に入ってくれて一段落しましたが、教えるほど経験のあるのは、大会に出たことのある赤池だけで、特に女性を教える人がいません。週に一回は赤池の下宿「松波荘」に4人で集まって徹夜の指導協議です。もっとも最後のころは麻雀にかわっていましたが。

そんなわけで私は女性役をやれされることがよくありました。また、自力だけでは技術の向上は困難なことから教習所に集団のレッスンを申し込んだところ心よく引き受けてもらいました。

冬春の合宿 合宿所は裏門の近くのおんぼろ校舎でした。朝支度が終わると全員で朝食に出かけます。どこからか『夜明けの歌』が始まって、全員で合唱しながら千葉大の裏道をスローフォクストロットふうに歩きます。『春夏冬五合』の札がかかっている川中食堂に行きます。あきないはんじょうと読むそうです。合宿に合わせて、特別に店を開いてもらっていました。

練習場は使われなくなった教室です。明礬をまいてすべり具合を調整します。床がもろくなっているためヒールターンをするとズボと穴があいたりします。やがてコンクリート校舎がつくられリリウム張りの教室を借りられるようになりました。床はましになったのですが、練習のたびに机をかたづけ、音響装置をセットするのはたいへんでした。古い机を材料にスピーカ等音響装置が入る鍵のかかる頑丈な大きな入れ物を手作して教室の後部に常備しました。そのころはおおらかだったので、大学側は黙認してくれました。

夏合宿 は妙高高原で行われました。そのころはほとんど、冷房がありませんから、高原といえども練習は暑くてたいへんでした、組むとお互いの汗がじとっと伝わって気持ちのいいものではありませんでした。帰りは小海線で松原湖によって帰ったのですが、列車の待ち時間が長くて、誰かが駅前でレコードをかけるとシャドウするもの組んで踊るものが現れやがて皆が踊りはじめてしまいました。野外で踊るのもなかなか気持ちのよいものです。

学生だけの競技ダンスを目指して、ようやく **本格的な学内発表会** を開くことになりました。競技場は、なんと剣道の道場です。靴であがるなんてとんでもないと最初は剣もほろろに断られたのですが涉外担当が以前に剣道部にいたこともあって、粘り強い交渉の結果実現しました。学内発表会は対外競技会を目指すためのステップであると同時に学内に情報を発信する役目もなっていました。男性は学生服さえあればよかったのですが、女性は自分でドレスを作って出場します。審判は、指導部が行いました。優勝は『内田-飯間組』だったと記憶しています。

連盟に復帰 したのは私たちが卒業して数年後になりました。まだ全校ではなかったと思いますが多くの大学が学生ペアになっていました。東大の舞研が学内で猛烈な訓練を始めたことが週刊誌の話題になりました。復帰は大変だったと聞いています。休連したあとも、連盟から千葉大の目指す方向に動き始めたと何度も連絡をとったのに返事がなかったとのことでした。連絡がくるとは思わなかったので一度もクラブの連絡ポストを見たことがありませんでした。後輩が苦勞して復帰をしたもののなかなかいい成績をとることができませんでした。またクラブの基板が危なくなることもありました。現在の競技ダンス部は、私たちが理想として描いた「学生ダンス」になっていると思います。後輩の活躍を祈っています。

1966年卒 本郷 昭三